

視野の広い 目的意識を持った 学生よ、来たれ

法政大学 総長・理事長 増田壽男

取材文／堀水潤一 撮影／中岡邦夫



【総長・理事長プロフィール】1941年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。同大学院経済学研究科博士課程単位取得満期退学。法政大学経済学部教授、同学部長、法政大学比較経済研究所所長などを経て08年より現職。日本私立大学連盟常務理事。

【大学プロフィール】1880年創立。法、文、経済、社会、経営、国際文化、人間環境、現代福祉、情報科学、キャリアデザイン、デザイン工学、理工、生命科学、GIS（グローバル教養）、スポーツ健康学部の15学部36学科体制。来年が創立130周年。

国際文化学部および人間環境学部の設置（99年）を皮切りに、ここ10年、新学部の設置や改組を続けてきた本学は、スポーツ健康学部の新設（09年）によって15学部体制になりました。

経営学部の設置（59年）以来40年間、6学部体制を維持してきたことをみれば、遅い改革のスタートだったわけですが、その分、凄まじい勢いを発揮し、注目を集めることになりました。

こうした教学改革は、環境や福祉など、現代社会が抱える新たな課題やニーズに積極的に対応してきた結果です。

例えばキャリアデザイン学部は、生涯にわたり自分らしい生き方を志向できる人材育成を目的に設置されました。同学部の先進的な実践は今、全学的なキャリア教育の充実につながっています。また、グローバル教養学部は授業を全て英語で行うなど、世界で活躍しうる人材の育成に努めています。

一方、既存の伝統学部も、理念や教育目標を見つめ直し、時代の要請に対応したカリキュラムや教員編成を行うなど、改革を進めています。

中でも急務なのは学士力育成体制の見直しです。欧米の大学に比べ「入るのは難しいが出るのは簡単」と言われて久

しい日本の大学ですが、いつまでもそんな状況を許してはいけません。私は、高校卒業時の学力は日本の方が遥かに上だと考えていますが、一年もすれば抜かされてしまう。向こうの大学は簡単に進級できませんし、入学してからがスタートという意識が強いのです。

残念ながら日本には、入学した時点で疲れきっている学生もいます。偏差値や点数といったものの見方に捉われず、どうか視野を広げ、目的意識を持つて入学してほしい。本学には、自立心が強く、群れることなく個性を伸ばす学生が多いように感じていますがいずれにしろ希望に満ちた学生は大変な勢いで伸びていくものです。

閉塞感に包まれ展望が見えない日本社会の問題を誰が解決するのかといえば、若者以外にいません。既存の常識に捉われず「自分はこうしたい」という強い意志を最も持っているのは若者です。確かにこれまでの社会は、卒からはみ出す者を歓迎しない風潮がありました。しかし、彼らがきちんと問題を提起し、既存の知識や秩序を壊していく程の勢いを持てば、日本の将来は明るいはず。

私はそこに期待しています。